

Molecular Factors Associated with Pemetrexed Sensitivity According to Histological Type in Non-small Cell Lung Cancer

吉田, 月久

<https://hdl.handle.net/2324/1931819>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名：吉田 月久

論 文 名：Molecular Factors Associated with Pemetrexed Sensitivity According to
Histological Type in Non-small Cell Lung Cancer

(原発性肺癌におけるペメトレキセドの感受性規定因子)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

【背景】この研究の目的は、外科的に切除された非小細胞肺癌におけるペメトレキセド（アリムタ®）の感受性予測因子となりうる分子について検討することである。【方法】外科的に切除された非小細胞肺癌 69 症例（腺癌 55 例、扁平上皮癌 14 例）に対して、SDI (succinate dehydrogenase inhibition) 試験を行い、ペメトレキセドと他の抗癌剤に対する感受性を検討した。ペメトレキセドの標的となる分子 (TYMS(thymidylate synthase)、DHFR(dihydrofolate reductase)、GARFT(glycinamide ribonucleotide formyltransferase)) とペメトレキセドの代謝に関わる酵素 (GGH(γ -glutamyl hydrase)、RFC(reduce folate carrier)) の mRNA 発現を定量し、感受性との関連性を検討した。【結果】扁平上皮癌では、腺癌と比較して、TYMS の発現が高く、RFC の発現が低かった。一方、腺癌では、GGH の発現が高いほど、ペメトレキセド感受性が低かった。【まとめ】ペメトレキセド感受性が組織型によって異なる理由として、TYMS と RFC の発現量の違いが関連している可能性が考えられた。また、腺癌では、GGH の発現がペメトレキセドの潜在的な感受性予測因子となる可能性が考えられた。